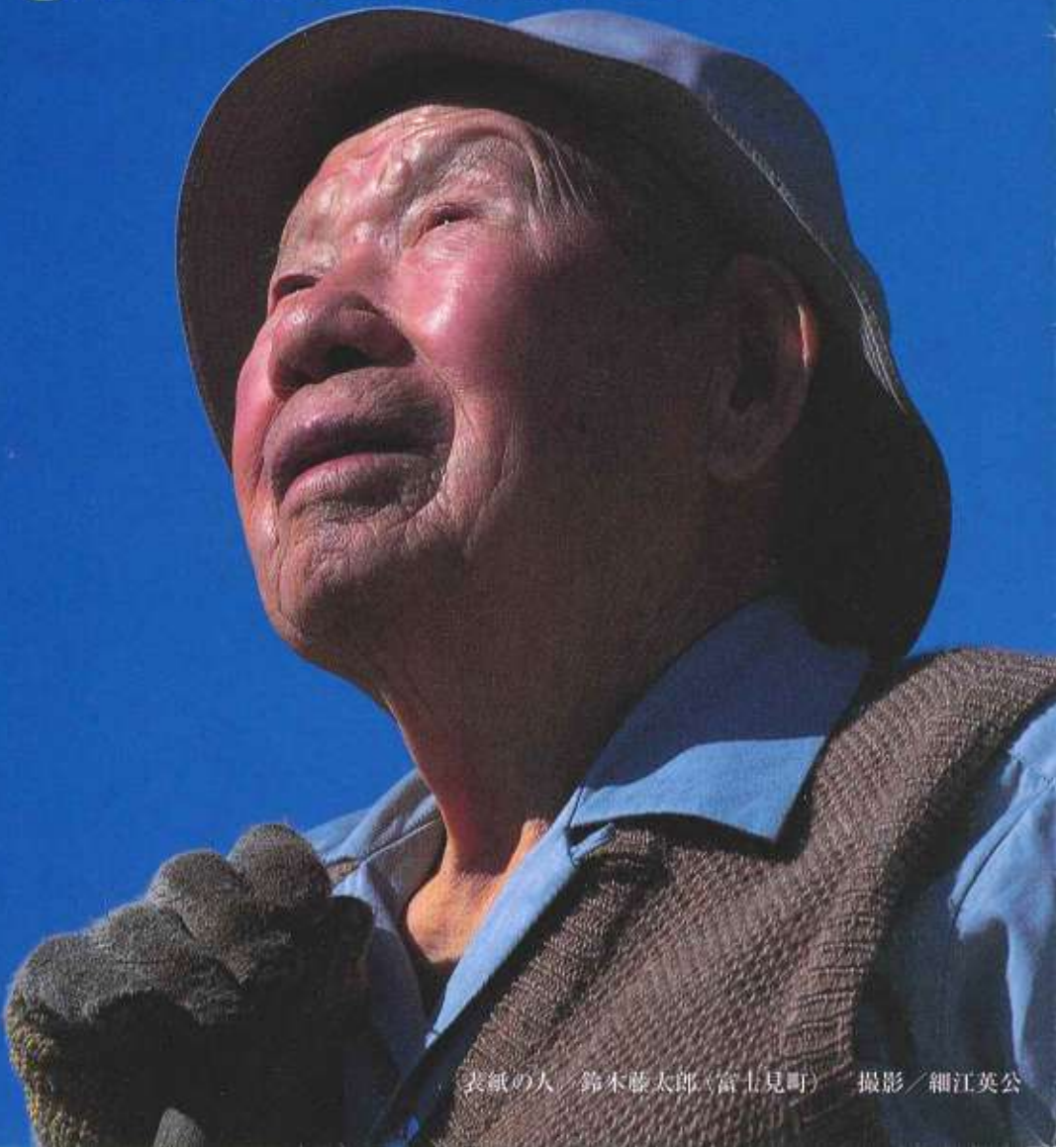
えくてびあん

8 立川と語ろう　立川に生きよう

AUGUST 1999 EKUTEBIAN Vol.18 No.181



表紙の人　鈴木藤太郎（富士見町）　撮影／細江英公

くらふと画報 ⑦ 協力：立川市クラフト同好会

ベニヤ板のコーナー・ラック

夏休みの宿題に、親子で挑戦

出来上がりの構造は簡単だが、いざ作り始めると意外と手こずるベニヤ板の工作。板に厚みがないので釘を打つのにも一苦労だ。今月は1人よりも、たとえば親子で作ってみてはいかがだろうか。立川市クラフト同好会の田中さんは、西多摩郡瑞穂町の大工さん。木の扱いはお手のものだ。「メンをとったらカンナやヤスリをしっかりかけ、できるだけ正確にスミをいれる（採寸して印をつける）こと。釘を打つときは、ひとりは本体をしっかり支えてあげましょう」。その田中さんに“お父さん”役をやってもらい、所要時間2時間。

今月の先生
田中登志夫さん

1 ベニヤ板を切って側板、棚板の作成。今回は3段のラックを作るので、棚板は計4枚必要となる。

2 カンナや紙ヤスリで断面を整える。紙ヤスリは木片などに巻いて使うと仕上がりがより滑らかになる。

3 このコーナーではお馴染みの「焼き」の作業。ベニヤ板は薄い合板なので火のあて方には注意が必要。

4 置く物を想定して棚板の位置決め。こうして実物を並べてみることで、出来上がりの感じがつかめる。

5 棚板の位置、釘をうつ場所などにスミ入れ。最下段の棚板は、地面から3ミリほど浮かした位置に。

6 組立て。補強に木工用ボンドを塗って釘を打つ。打ち損じのないよう1人は本体を支えてあげること。

ホンネde語ろう

絹（シルクロード）の道で広げた「幅の人生」

東京立川ロータリークラブ副会長 榎戸岩雄さん

■榎戸岩雄（えのきどいわお）：栄町3丁目在住。ロータリークラブでの活動をはじめ多岐に活躍される一方、驚くべきはそのチャレンジ精神。20代の時のアメリカ大陸単独横断を皮切りに、10年に一度のペースで大旅行を計画。地球を歩き周る。平成4年9月、シルクロードの敦煌からチャルクリクまでをラクダで歩く「西域南道探検隊」に参加。約1ヶ月かけて800キロの砂漠の横断に成功した。「チャンスは今、できる時にやっておく」が信条の55歳。砂川生まれ砂川育ち、生粋の立川人である。
■立井啓介（たていけいすけ）：本誌編集人。

啓介　シルクロードをラクダに乗って横断した立川人がいると聞いて、思わず伺ってしまったんですが、榎戸さん、こちらはまた素敵な空間ですね。「倉」だったそうですが（注・対談は榎戸邸の倉を改造したサロンで行われた）。

榎戸　いやあ、お恥ずかしい（笑）。まあ、先祖からせっかく残してくれたものですから、家内と相談して、こうしてサロン的な部屋を作ろうということになったんです。昔の建築のいい部分は残して、二年前に完成しました。

啓介　そうだったんですか。では早速なんですが、ラクダでシルクロード横断というのは本当の話なんですか。

榎戸　シルクロードといっても全行程ではないんですよ。敦煌（とんこう）を出発して、古代王国・楼蘭（ろうらん）の近くのチャルクリクというところまでの「西域南道」と呼ばれるシルクロードの一部なんです。

啓介　一部とはいっても、実際どのぐらいの距離なんでしょうか。

榎戸　およそ八〇〇キロですかねえ。

啓介　八〇〇キロ！　東京からざっと福岡ぐらいまではあるでしょう。それを何日で歩かれたんですか。

榎戸　約一ヶ月、三十日ぐらいですね。

啓介　そもそも、この旅を思い立ったきっかけは何だったんですか。

榎戸　これはねえ、新聞に『地球と話す会』という市民グループの告知が載ってたのを家内が見つけたんです。こういう旅を計画していて、参加者を公募していると。それで応募してみたんですよ。

啓介　奥さまから勧められたんですか。

榎戸　そうなんです。「お父さん、行ってみたら」って（笑）。事前の説明会も私が仕事で忙しいんで、家内が出てくれたりしてね。

啓介　でも砂漠ですから、一ヶ月以上も音信不通になるわけでしょう。

榎戸　ウチはね、こういうの好きなんですよ（笑）。もともと私は砂川の人間で、ずっとここで生まれ育ったもんで、若い頃から外の世界を見て周りたいという願望が強かったんですね。それで二十代の時、一人でアメリカ大陸を横断したんです。その後三十代になって、今度は家内と子供を連れて、同じくアメリカを四十五日かけて旅したりしてね。それで四十代も終わりに近づいた頃、たまたま家内がそういう新聞記事を見つけたんです。それで「お父さん、チャレンジしてみたら」ってことになったんですよ。「今できることは、今挑戦してみよう」という気持ちが、家族みんなに根付いちゃったんでしょうね。

啓介　いいですねえ、ご家族でロマンを共有できるというのは。この辺で具体的に旅の様子を伺っていきましょう。最終的に何名ぐらいが参加されたんですか。

榎戸　約六十人いました。全員がラクダに乗って、それを十人ぐらいづつ、六つのキャラバンを作って進むわけですね。中国の未解放地区を歩くわけですから、それぞれの隊に人民解放軍が付き添うんですよ。

啓介　あの、ラクダの歩く速度というのはどのくらいなんですか。

榎戸　時速四キロですから、まあ人間と同じぐらいですね。一時間歩いて小休止という感じで進みました。

啓介　振り落とされる心配なんてのはないんですか。

榎戸　地面にラクダ草というのが生えていることがあってね、これはラクダの大好物なんです。見つけるとすぐ食べようとして躯を傾けるんで、油断していると落ちてしまう。大事には至りませんでしたが、六名が落下しましたね。

啓介　わかりやすく「衣・食・住」で聞いていきたいんですが、まず「衣」の話でいうと、基本的に着のみ着のままということでしょう。砂漠というのは暑いんですか、寒いんですか。

榎戸　両方です（笑）。昼は摂氏四十度、夜から朝方にかけてはマイナス十度まで下がる。現地の言葉で「朝は綿入れ、昼はサラサ、ストーブ囲んで西瓜を食う」という言い方があるそうです。

啓介　昼夜で五十度の温度差ですか。

榎戸　摂氏四十度といっても標高が三千メートル以上ですし、砂ぼこりや風が強いんで薄着にはなれません。面白いことに、右の耳たぶがしもやけになってて、左が真っ赤に日焼けしてるんですよ。

啓介　ああ、なるほど。常に東から西に進んでいるから、身体の左側が日光、右側が日陰になるわけですね。

榎戸　そういうことですね。

啓介　「食」はどうされてたんですか。

榎戸　中国人の調理人が同行してるんですよ。朝と昼は簡単に済ませるんですが、夜は豪華でした。羊をたくさん連れていくんです。

啓介　え、ヒツジですか。それは食用なんですか。

榎戸　ええ、一頭づつ解体して料理するんですよ。私は未年（ひつじ）なんで、ちょっと複雑な気持ちだったんですが（笑）。水は各自、一日水筒一本分。洗顔も歯磨きも全部その分量で賄うんです。途中、何本か流れている川で補給するんですが、浄水器で一度に浄水できる量も限られてしまうので、本当に貴重なんですね。

啓介　「住」は？

榎戸　勿論テントで野営ですね。何しろ八〇〇キロのうち、六〇〇キロは砂漠ですから。村や人の住んでいるところなど、見当たらないんです。

啓介　ちょっと汚い話ですが「用足し」はどうされたんですか。

榎戸　もちろんその辺で（笑）。昼間はともかく、夜は必ず二人以上で行くんです。オオカミがいるんで、一人だと危険なんですね。でも、夜になると野営を出て、各自用を足しに行くんですが、それぞれのランタンや懐中電灯がチラチラ灯って。それでお尻を出してしゃがんで、空を見上げると、もう星がすごいんですよ。流れ星もビュンビュン見えるし、満天の星空とはこういうことをいうんだなと感動しましたねえ。

啓介　先ほど標高の話が出ましたけれど、三千メートル以上というと、常に富士山よりも高いところにいるわけですよね。

榎戸　それでも高山病にかかった人は二人だけでした。皆さん、それぞれ鍛えてから参加されたようですよ。

啓介　榎戸さんは何かトレーニングはされていたんですか。

榎戸　私、走ってるんですよ。今年も青梅マラソンに参加して。三年前にはホノルルマラソンで完走したんです。タイムは聞かないでくださいね（笑）。

啓介　そうだったんですか。しかし、それだけの旅を隊を組んで行うとなると、チームワークも必要になってくるでしょう。都会の生活では、上辺の関係さえ保っていればやっていけますけれども。

榎戸　そうですね。気兼ねがあったのは最初の数日で、後はすぐに家族のようになってしまいましたねえ。もうそこに行くと地位とか肩書きとか、そんなものは全く通用しない世界ですから。お互いに命を預けている部分もありましたし、自分自身が「磨かれているなあ」と何度も思いましたねえ。人生のね、大切な発見がたくさんあったんですよ。

啓介　お話を伺っていて、僕は榎戸さんがやっていることこそ、本当の「旅」ではないだろうかと思います。

榎戸　人から見れば遊んでいるとしか見られないんじゃないかなあ（笑）。

啓介　でも、その遊びの部分こそが人間の本質なんじゃないでしょうか。「シルクロードに行こう」と発想すること自体、僕は一つの才能だと思いますよ。人生をこう生きようよ、という発想の力というか。

榎戸　そう云っていただけると嬉しいです。私ね、思うんですが、人生には縦の人生と横幅の人生と二つあるんじゃないかと。縦の人生が寿命だとすると、経験や、そこで生まれた感情が「人生の幅」ではないだろうか。できる限り、その幅を広げられないかと……。

幸町

和洋菓子 たちばな	幸町5-2-16	537-0347
BSタイヤショップ 佐藤商会	幸町5-10-2	537-0912

錦町

coffee shop 遊香	錦町1-4-24	527-3840
ステーキレストラン リブレ	錦町1-8-3	527-1630
和菓子処 ゆうき	錦町1-8-5	525-0780
美容室 アリス	錦町1-15-21	525-1100
パンと洋菓子 うちのやブルマン	錦町1-18-7	524-9280
駄菓子・ファンシー むぎばたけ	錦町2-1-1	526-0210
美容室 FALCO	錦町2-1-10	528-2389
諸官公庁御用達・日用雑貨 池田屋	錦町2-1-10	522-3731
酒の寿屋	錦町2-1-13	522-3625
しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶ・りん	錦町2-1-33	527-2228
スペイン料理 TAPAS	錦町2-2-29	529-0733
振興信用組合 立川支店	錦町2-2-32	524-1471
三田花店本店	錦町2-5-23	524-4187
セガミ薬局	錦町2-7-9	525-9212
スポーツ用品 マルミヤ	錦町2-7-8	522-2912
アミューたちかわ	錦町3-3-20	526-1311
そば処 高尾亭	錦町5-5-31	522-2710
リストランテ ラ・ポポラリータ	錦町6-9-25	527-3880

えくてびあんの輪
人がふって、街があります。
あなたがふって、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は幸町・錦町・羽衣町・柴崎町のお店です。

羽衣町

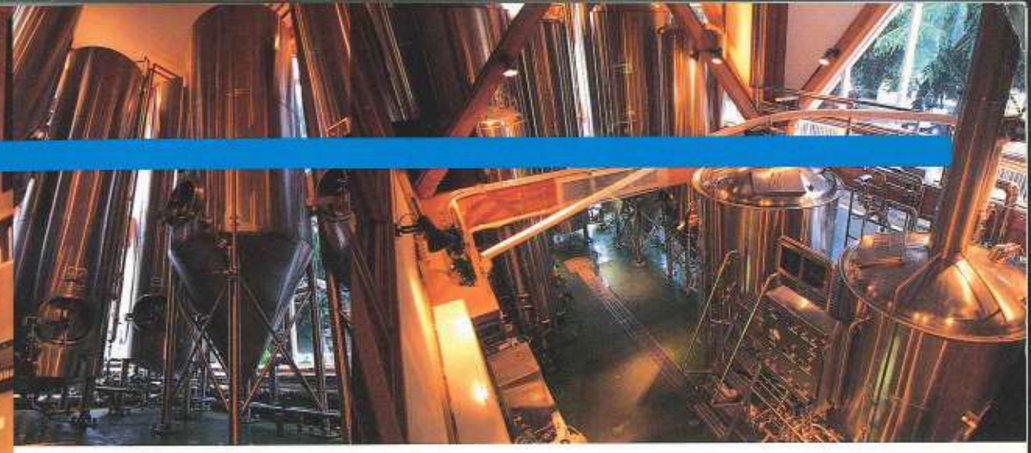
洋菓子サロン ケーキスタジオ35	羽衣町2-6-1	527-6808
林歯科	羽衣町2-7-10	522-5657
中島豆腐店	羽衣町2-12-34	522-5732
珈琲屋 らうむ	羽衣町2-27-9	526-3643
和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14	526-3698
フレッシュフルーツ 立川商店	羽衣町2-30-6	522-3565
本・事務用品 泰明堂	羽衣町2-31-1	522-3353
おそのい時計店	羽衣町2-32-2	522-5211
文具の ないとう	羽衣町2-33-1	522-3677
赤松タバコ店	羽衣町2-42	524-7852

柴崎町

カフェ べる・こむーね	柴崎町2-2-7	529-7800
味乃 寿司由	柴崎町2-2-8	522-3733
関田酒店	柴崎町2-2-18	524-2960
ビストロすぎ浦	柴崎町2-2-23	525-9929
ステーキ&欧風料理 クワトロ	柴崎町2-3-3	528-2983
Casual Restaurant ラ・バンバ	柴崎町2-3-3	524-5800
キャノン01ショップ	柴崎町2-3-6	528-1501
コミュニティストア はなむら	柴崎町2-3-9	522-2491
不動産 ユウ都市企画	柴崎町2-3-13	528-2566
不動産 コマツホーム	柴崎町2-4-6	525-5811

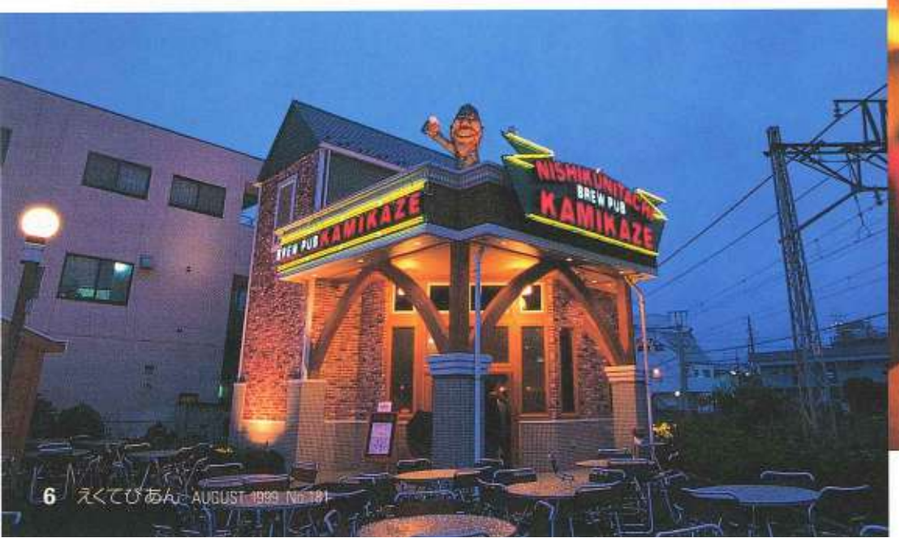
地ビール登場。

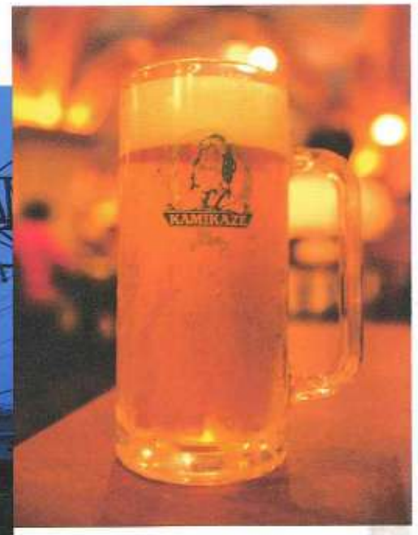
立川初のオリジナル“地ビール”が誕生した。その名も『KAMIKAZE（カミカゼ）』ビール。
カリフォルニアから招かれたブルワー（ビール醸造者）、マーク・ハモンさん（33）の指導のもと、全国でも類をみない完全自家醸造体制を確立。研究に研究を重ね、３種の英国風オリジナルビールを生み出した。
現在、マークさんとともに３人の若者が醸造に携わっている。
今年3月には販売開始にあわせ、羽衣町・西国立駅前にビアレストランがオープン、連日超満員の様相を呈している。



作る人がいるから味わう人がいる。

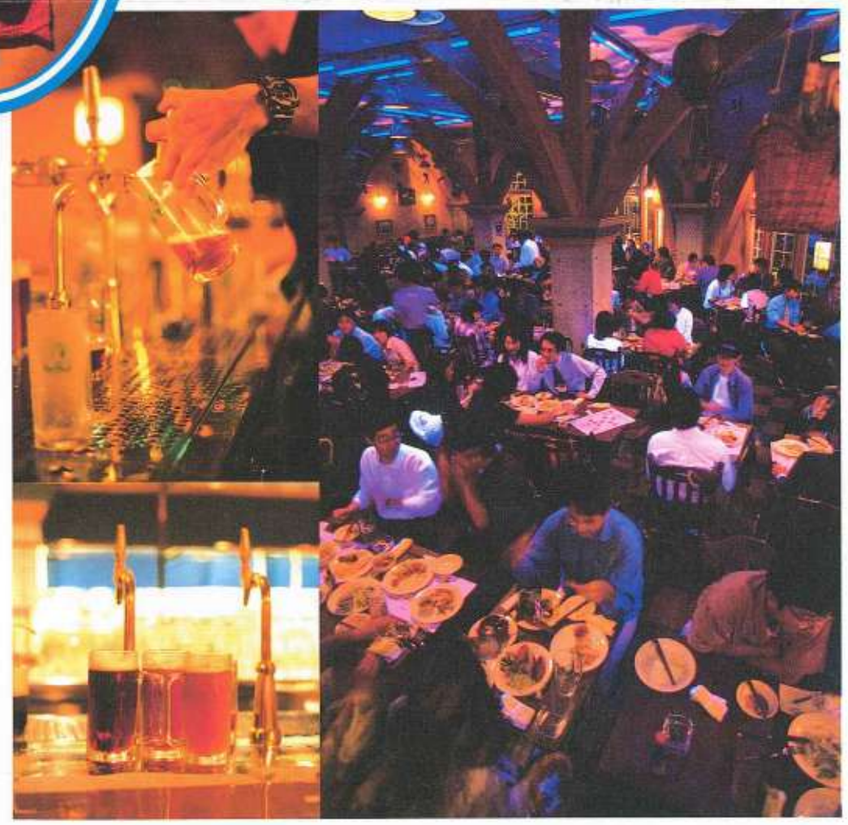
金色に輝くタンクが美しい工場の内部。機材はすべてドイツから輸入。モルト（麦芽）を砕き、煮沸、発酵、貯蔵に至るまですべての行程をこの工場で行っている。市販のビールは日持ちさせるために酵母をろ過するが、『KAMIKAZE』はその過程を省き、酵母を生かしたまま瓶詰めすることに成功した。ここで働くブルワーは４人。写真左から菊池勝治さん、東順也さん、阿原正人さん、そしてマーク・ハモンさん。日によって変わる気温や湿度と戦いながら、高品質のビールを醸造することに全精力を注いでいる。





サロンの空気を醸すビアホール。

ビールがオリジナルならば、飲む場所も独創的でなければ。『KAMIKAZE』のオーナー、小林日文さん（錦町）がこだわったのはその１点だ。ビールの販売開始にあわせオープンされたビアレストラン『西国立ブルーパブ・カミカゼ』はその想いが凝縮された空間となった。気鋭のアーティスト、W・ストラッドフォード氏の手によるキャラクターオブジェが店内のあちこちを彩り、広いフロアを埋める陽気な話し声は高い天井にこだまする。ここにはひとつの世界ができあがっている。



ゴロさんの独断毒語 ①

毒ばっかし

煩悩がない人はいないと云われるほどに、煩悩から逃れるのは難しいようです。

私の周りには、仏教に通じているひとがたくさんおりまして、映画『男はつらいよ』の中でよく寅さんに説教をするお尚さんの笠智衆のような方もいてくださって、いろいろと教えてくださるのですが、ナンですってね、人間の善根に害毒を与える三つの煩悩を「三毒」というそうです。

三毒というのは「貪（とん）・瞋（しん）・痴（ち）」をいい、「貪」というのは自分の心の欲望にまかせてむさぼりに耽ること。「瞋」は他に対する怒りは心身の平和をみだすことおびただしい。よく云う「アタマにきた」とか「マジギレ」だとか云っているのは、みんなこの「瞋」に属するんでしょうな。三番目の「痴」は読んで字のごとしで、おろかなこと。智慧がなく、物ごとに適切な判断をくだせないことをいうのだそうです。

私はこの「三毒」の話を聞いたときには、正直、ドキンときましたね。普段、心臓の強い私でさえ、頭（こうべ）をたれました。

そうでしょう。一毒や二毒なら、まあいいかということで納得もいたしますが、三毒が三毒ども、この身に備わっている。顧みれば（べつに、顧みなくたって）何十年とその毒を抱えて生きてきたわけです。「毒ばっかし」のこの身を、どうしたらいいのでしょうか。

私は一計を案じました。足掛け十五年もやってきた「えくてびあん」に「独断毒語」なる連載をはじめて「毒」をまわりに散らかせば、少しは私の中の毒も減るのではないかと考えたわけです。どうです、なかなかの名案でしょう。

ところが、笠智衆に似たお坊さんがおっしゃるには、――そんなことをしたら、三毒の上塗りをするようなもんじゃ。

さあ、困りました。たしかに「人に毒づく」という行為は、一般の常識からみても好ましいものではないでしょう。毒を盛る。これはもう仏教どころか、犯罪です。去年の夏でしたっけ、和歌山で毒カレー事件で世間が大騒動になったのは。

私はまたまた一計を案じ、ほんの少し毒を盛る程度ならどうでしょうか。例えばラーメンに胡椒をふる、スパゲティにタバスコを掛ける。その程度なら味も引き立ち結構なこっちゃございませんか。

するとお坊さんは、――いまのお前じゃ、そうするより仕方あるまい。だが毒を盛るのはほんのちょっとにしておけよ、ほんのちょっとに。

ようやくお赦しがでたのですが、それに致してもナンですなあ、私は東京・上野の生まれですが、昔は露地の奥の方まで、よく通るような声で、――毒消しゃいらんかねえ。

とクスリ売りが歩いていたものです。あれは「三毒」を消す妙薬だったんでしょうかねえ。

（やまだごらう・詩人）

イラスト 綾 幸子

連載 四字熟語（24）

脚下照顧

「脚下」は足もと、「照顧」は、照らし合わせてしっかり調べること。自己を顧みて、充分に気をつけること。

足許を見よという意味。禅家で、いたずらに外に向かって真理を追い求めるよりも、まず自己の本性を明らかにせよといいましめ。

ひとに注文をつける前に、まず自分のことを反省せよということ。「照顧脚下」ともいう。

立川に育てられて六十三年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel.527-0111(代)

『ライフカード 定期預金』
店頭表示スーパー定期
利率に0.5%上乗せ
しんこう信用組合
〒190-0022 立川市錦町2丁目2番32号
電話（042）524－1471(代)

第7回えくてびあん杯争奪

立川べーごま選手権

第7回戦A組

青木 久選手
立川市長

岩崎 泉選手
立川商工会議所会頭

「剣道じゃ適わないからねえ」と岩崎選手

べーごま。何とも懐かしい呼称である。大の男が少年時代の気持ちにもどって、勝負に興じる。これもまた一興ではないかとトーナメント制で「選手権」を連載することになった。第1回は市長と商工会議所会頭という巨頭対戦。両者ともにあまり経験がないという通り、なかなか「床」に入らない。だが、さすがに両者とも運動神経がいいのか、30分の練習時間で一流選手に早がわり。勝負は7個ずつのこまを持ち制限時間内で多く取った方が勝ちというルール。今回は20分の制限時間。はじめ市長が有利に運んだが、後半のねばりで「8対6」、岩崎会頭の勝利、2回戦へと進む。「剣道じゃ適わないから、せめてべーごまで」とは会頭の弁。

真味百撰 ㉘

和菓子・甘味処 甘泉堂

曙町1-14-12 / 522-4305
10:00～19:00 / 日曜定休

10年を置いて復活の甘泉堂 満を持して登場の3代目は 小豆にこだわったきんつばで勝負

昨年9月、曙町「甘泉堂」が10年振りに暖簾を出した。初代塩田善一郎さんが亡くなった当時まだ17歳だったお孫さんの聯一郎さんが、10年の修行を積み終え3代目として立ったのだ。

初代の卓越した技術は赤坂・日枝神社で行われる和菓子の祭り、嘉祥祭の第一回で菓子を奉納する役を務めたほど。「立川の甘泉堂」はこの世界では確固たる存在感を持っていた。聯一郎さんは製菓学校に通う頃から、周囲の「甘泉堂の孫」という視線の中に身を置いてきた。腕が良くて当たり前、美味しくて当たり前というはじめから高いハードルを前に、それでも祖父と同じ道を行くことをためらったことはないと言う。小豆が違えば餡の味は全然違う。用途別に4種類の小豆を使い分ける。きんつばには丹波の大納言を使用。店内奥には表の喧噪から隔てられた静かな空間が広がり、和菓子屋ならではの、ひとつひとつの素材にこだわった甘味が楽しめる。お母さまの伸子さんの手による煮物と赤飯がセットの赤飯弁当（700円）も好評だ。「技術では一生初代にかなわない。でも自分なりの和菓子の世界は打ち出していきます」そう言い切った3代目の眼は、ほとんど創業者の熱度を持っていた。

右・きんつば（150円）。豆そのものの味わいが生きた一品。
左・くりーむあんみつ（700円）。寒天の微妙な食感がここならでは。

表紙の人 鈴木藤太郎さん（富士見町）

百二歳。いまだに畑仕事に精をだしている藤太郎翁。えくてびあんは「ベスト立川人・展」で翁を立川のベスト・ファーマーだと讃えた。パーティーでは堂々の挨拶をして、トマトがまだ「赤茄子」と呼ばれ、丹精して育てても食べてくれる人がいなかった時代の話をしてくださった。近代日本農業の先駆者であり、今日なお畑に立つ精神力は尋常ではない。

関東大震災のとき、立川からリヤカーを引いて、神田まで歩いて人助け。義侠心に富み、骨太の体躯。そして何よりも「こころ」が太い。

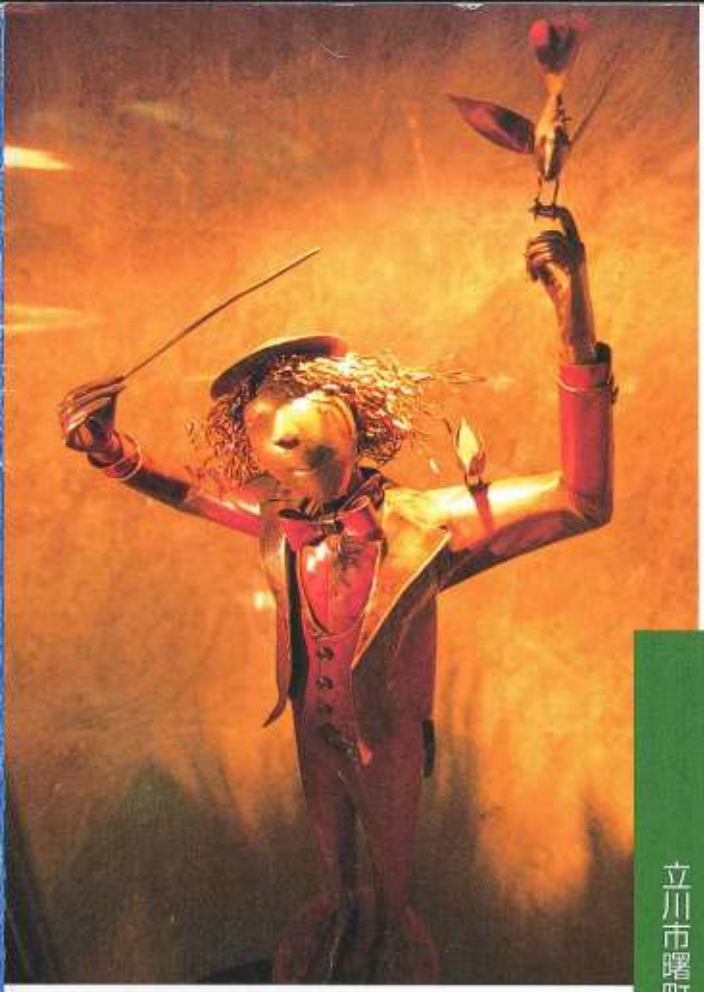
（於・多摩川河川敷／撮影・細江英公）

東風

榎戸岩雄さんのシルクロードの旅は壮烈だったであろう。団体の旅とはいえ、パリやロンドンをお上りさんよろしくキョロキョロ見物しているのとは訳が違う。駱駝は買い取ってしまい、旅の完成と同時に売るのだそうだが愛情が移って別れづらかったという◆駱駝はもともと意地の悪いところがあって、振り向いて乗っている人間に唾をひっかけることがあるという。長く乗っていると、内股がいたくなってくるので、途中で降りて駱駝を引っ張って歩きはじめる人も出てきた。時速が一里だというから、人間の歩速とあまり変わらないのだ。それにしても衣食住にわたってのぎりぎりの共同生活。命を預け合って歩いたシルクロードの旅は生涯の宝に違いない◆狼が出るおそれがあるので手洗いは二人以上が連れ立ってゆく。実際には水がない砂漠なので「手洗い」ではないのだが◆ひとはしばしば「旅」と「旅行」を混同して憚らない。谷口隆之助先生は「旅」についてこう書いておられる。『旅とは存在の究極を志向するところの惑（まど）きであり、旅人の感覚で生きるということはこの地上には決して完結がないということだ』。この世には「旅」を識っている人と、そうでない人がいる◆えくてびあん　小さな山を　越えました

【第二次えくてびあん同人】
編集 新井紀美子 / 大久保清志 / 小林康史 / 空谷 空 / 山田五郎
デザイン 池田隆男 / AMNET DF
写真 中村 伸 / 五来孝平

えくてびあん 8月号
第18巻 通巻181号
平成11年8月1日発行
発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人 立井啓介
発行人 名尾岳真
印刷 (株)大廣社



赤川政由

Masayosi Akagawa

鋼板造形作家。
1951年大分県日出町生まれ。
アトリエ『BONZE工房』
（高松町）主宰。

赤川作品十二撰 1

「コンダクター」

立川市曙町

一見すると少年のような風貌のこの像、実は〝男装の麗人〟そう、女性なのです。

はじめはヒゲ面のオジさんを予定していましたが、アイムホールという場所柄、女性の指揮者こそふさわしいと、体は全体的に華奢に、指先はほっそりとさせ、柔和な表情を持たせて中性的な像にしました。

女性もリーダーシップを取る時代、女性ならではの感性で、時代を指揮してほしいのです。

魔法を使うのは女性と昔から相場が決まっています。彼女たちは人生を豊かに、楽しくする術を知っているのです。

（1994年制作）